源氏物語總

加藤順三著
島田退藏著

樂浪書院刊

昭和十三年一月二十日印刷
昭和十三年一月廿五日發行

頒價二圓

著者　加藤順三
　　島田退藏

東京市中野區川江古田一ノ二〇五四
發行者　篠田太郎

東京市神田區小川町一丁目十一番地
印刷者　綾部喜久二

宮本快三印刷製本所

發行所　東京市中野區江古田一丁目二〇五四番地
樂浪書院
電話中野七〇九二番
振替東京八〇〇四七番

源氏物語總釋第四

目次

若菜上……加藤順三（一）
若菜下……島田退藏（一五九）
柏木……島田退藏（三三五）
横笛……加藤順三（四〇九）
鈴蟲……加藤順三（四四一）

若

菜

上

加藤順三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

朱雀院には、過ぎつる行幸の後、ずつとその頃から御病氣でいらせられる。これ迄も御重態であられたが、わけて今度は心細く思召されて――自分は年來も出家の望みが深かつたが、御母后の御在世中はなにかと御遠慮申上げ、今日まで躊躇してゐたが、やはり頻りにその方に心がひかれるのであらう、先が長くもない心地がする――など仰せられて、その御支度を遊ばすのであつた。御子達は東宮の外に、皇女たちが四所いらせられる。その中に、かうした姫君がある――。かつて、藤壺と申上げた方は、先帝の時の源氏でいらせられた。朱雀院がまだ東宮と申上げた頃に入内せられて、行く〳〵は后にもおなりになる筈の方であつたが、取立てての後ろ楯もない上、母方もこれぞといふ血統でなく、更衣程度の御腹であつたので、宮中の御生活も心細げな有様で、それに、一方では大后が妹の尙侍（麗景殿夜）をお上げになり、並ぶ者もないお

朱雀院の帝、（一）ありし行幸の後、その頃ほひより、例ならず惱み渡らせ給ふ。もとよりあつしくおはします中に、この度は物心細く思召されて、年頃も行ひの本意深きを、后の宮のおはしましつる程は、萬づ憚り聞えさせ給ひて、今まで思し滯りつるを、「猶その方に催すにやあらむ、世に久しかるまじき心地なむする」など宣はせて、さるべき御心設どもせさせ給ふ。御子達は春宮を措き奉りて、女宮達なむ四所おはしましける。その中に藤壺と聞えしは、（二）先帝の源氏にぞおはしましける。まだ坊と聞えさせし時參り給ひて、高き位にも定まり給ふべかりし人の、取立てたる御後見もおはせず、母方もその筋となく物果敢なき更衣腹にて物し給ひければ、御交らひの程も心細げにて、大后の尙侍を參らせ

待遇をせられたりなどする事情もあつて、自然それに壓倒せられて、主上も御心中では不憫なものに思召しながらも、ついそのまに御退位になつてしまつたから、女御も甲斐なく口惜しくも、わが不遇を恨みなげきつゝ亡くなられた。その御腹の皇女、即ち女三の宮を院は多くの御子達の中でも最もいとしいものとして御養育せられた。常時お歳は十三四でいらせられる。

さて自分がいよ〳〵世を捨てゝ山籠りをした後の浮世に殘されて、誰の力に手頼つて過されることかと、たゞこの一事を心懸りに父帝も思し歎くのであつた。西山の佛寺の御造營も成り、そこへ御遷り遊ばす御用意をせられるにつけて、同時にこの姫宮の御裳着の式をも取急がれる。それで院中の尊い寶物、御手道具の類は言ふ迄もなく、手輕い遊藝の器までも少しでも由緒ある物を擇んですべてこの宮の御方に、お讓りに奉り給ひて、傍に並ぶ人なくもてなし聞え給ひなどせし程に、氣厭されて、帝も御心の中にいとほしきものに思ひ聞えさせ給ひながら、おりゐさせ給ひにしかば、甲斐なく口惜しくて、世の中を怨みたる樣にて亡せ給ひにし、御腹の女三の宮を、數多の御中に勝れて愛しきものに思ひ傳き聞え給ふ。その程御年十三四ばかりにおはす。

今はと背き捨て山籠しなむ後の世に立ちとまりて、誰を頼む蔭にて物し給はむとすらむと、唯この御事を後めたく思し歎く。西山なる御寺造り果てて、移ろはせ給はむ程の御いそぎをせさせ給ふに添へて、又この宮の御裳着の事を思し急がせ給ふ。院の内にやむごとなく思す御寶物、御調度どもをば更にもいはず、果敢なき御遊物まで、少し故ある限りをば、唯この御方にと渡し奉らせ給ひて、その次

なり、その次々の品をば他の御子達に御分配の事どもがあつた。

現在の東宮は、院がかうした御病氣の上に、御遁世ある御意向のよしを聞召して朱雀院へ行啓せられる。母女御も引添うて參向せられた。この方（承香殿女御）の院との御交情も、さして深い程度ではなかつたが、何しろ東宮を持たれたといふ御緣が並々ならず有難いものに思召すので、久しい間の御物語を懇ろにせられるのであつた。東宮に對しても萬事の心得、政治向の御用意などを教訓せられる。御年齡に比しては誠に大人しい御樣子であつて、後見の方々も、いづれも重々しい家柄の人々であるから院も御安心遊ばすのであつた。

「自分はこの世に何の執着も持たぬが、たゞ姫宮たちがあまた殘られる行く先の事を思ひ遣ると、さらぬわかれの折の羈絆ともなりさうな心地がする。これまでも他人の上で見た事ではある事も侍らず。女宮達の數多殘り留まる行く先を思ひ遣るなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。前々、人の上に見聞きしにも、女

次をなむ、他御子達には御處分どもありける。

春宮は、斯かる御惱に添へて、世を背かせ給ふべき御心遣ひになむと聞かせ給ひて、渡らせ給へり。母女御も添ひ聞えさせ給ひて、參り給へり。勝れたる御覺えにしもあらざりしかど、宮の斯くておはします御宿世の限りなくめでたければ、年頃の御物語、細やかに聞え交させ給ひけり。宮にも萬づの事、世を保ち給はむ御心遣ひなど、聞え知らせ給ふ。御年の程よりは、いとよく大人びさせ給ひて、御後見どもも此方彼方、輕々しからぬ中らひに物し給へば、いと後安く思ひ聞えさせ給ふ。「この世に怨殘

るが、女子といふものは、思ひもかけず世間に輕んぜられ、侮られる悲運に陷る事が誠に悲しく口惜しい。どうか、どの姫達をも、そなたの力の及ぶ治世には、なにくれと眼をかけて世話して下さい。その中でもよい後見のある子供のことは、それにまかせておく積りである。たゞ三の宮だけがあの幼少な年頃で自分ひとりを手賴りにして來た習慣から、自分が世を捨てたのち途方にくれるであらうと思ふと、誠に心懸りで悲しく思はれる」

と涙を拭きつゝお話になる。そして女御にも、女三の宮をわけ隔てなく愛するやうにお命じになつた。然し、亡き母女御が、人にまさる寵を得て勢があつた爲に、誰しも負じ心の張り合ひから、御仲もうまくゆかなかつたから、その感情が殘つて、今では特に憎いと迄はゆかずとも、心から氣をつけ後見しようといふほどには思はれぬのでないかと推測せられるのであつた。

は心より外に淡々しく、人に貶しめらるゝ宿世あるなむ、いと口惜しく悲しき。何れをも、思ふやうならむ御世には、樣樣に付けて御心とゞめて思し尋ねよ。その中に、後見などあるは、然る方にも思ひ讓り侍り。三の宮なむ、幼稚き齡にて、唯一人を賴もしきものと慣らひて、打捨ててむ後の世に漂ひさすらへむ事、いとゞ後めたく悲しく侍り」と、御目押し拭ひつゝ聞え知らせ給ふ。女御にも、心美しき樣に聞えつけさせ給ふ。されど、母女御の、人よりは優りて時めき給ひしに、皆挑み交し給ひし程、御中らひども、え麗しからざりしかば、その名殘にて、げに今は態と憎しなどはなくとも、誠に心とどめて思ひ後見むとまでは思さずやとぞ、推し量らるゝかし。

院は朝夕にこの御事を思ひ歎かれて、年が暮れると共に、御病もいよ〳〵重くなられ今では御簾の外にも出られない。これ迄とても御物怪の爲に時折御惱みはあつたが、こんなに永引き間斷もない御病症は見えなかつたのに、やはりこれが最後の別れよと思召すのであつた。

今では御讓位になつてゐるが、なほ御治世の始めから心を寄せて御奉公申上げた人々は、今もこの院の親しみ深く御立派な御樣子を想ひ、氣の晴れる宮仕へ所に思うて仕へられる方々は、心の限りこの事をお惜しみ申上げてゐる。六條院からも御見舞が屢々あつた。そして源氏御自身もお越しになる由を聞かれて、院は非常にお悅びであつた。恰度中納言の君夕霧が伺候せられたのを、御簾の中に引見して細々とお物語があつた。

「故院桐壺帝が御臨終の砌に、いろ〳〵御遺言もあつた中に、この院源氏の御事、今上冷泉の御事を

故院の上の、今はの刻に、數多の御遺言ありし中に、この院の御事、朝夕にこの御事を思し歎きて、年暮れ行くまゝに、御惱誠に重くなり增らせ給ひて、御簾の外にも出でさせ給はず、御物怪にて時々惱ませ給ふ事もありつれど、いと斯く打延へ、小歇なき樣にはおはしまさざりつるを、この度はなほ限りなり、と思召したり。御位は去らせ給へれど、猶その世に賴み初め奉り給へる人々は、今も懷かしくめでたき御有樣を、心遣り所に參り仕う奉らせ給ふ限りは、心を盡して惜み聞え給ふ。六條院よりも、御訪らひ屢々あり。自らも參り給ふべき由聞し召して、院はいといたく喜び聞えさせ給ふ。中納言の君參り給へるを、御簾の內に召し入れて、御物語細やかなり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自分に取分けて御依頼せられたが、さて位に卽いて見ると、もの事に程度があるので、心中の親しみは變らぬながらも、政治向きのつまらぬ間違ひから、あちらから隔心を受ける事情もあつたであらうと思ふが、源氏はこの年月、萬事につけてさうした怨みがましい氣持を殘してゐる樣子は少しも色に出されぬ。賢いといはれる人でも、自己に關する事になると、筋道を誤り、感情が働き、必ずその意趣を含み不正の行爲のある事も、昔でさへ例のあることだ。それでなにかの場合には、その怨恨の思ひがきざすこともあらうと、世人も疑惧してゐたのに、今までそれをよく堪へられ、私の東宮などにも親愛の情を寄せてゐられる。現在では更に親しい姻戚の關係ともなり、睦じくしてゐられるのを、心には誠に嬉しく思ひながら、もと〳〵自分の愚かな生れつきに加へて、わが子を思ふ親の心の闇に交り、却つてあまり身勝手に思はれてはと、わ

闇に立ち交り、頑なる樣にやとて、

今の內裏の御事なむ、取分きて宣ひ置きしを、おほやけとなりて、事限りありければ、內々の心寄せは變らずながら、果敢なき事の誤りに、心置かれ奉る事もありけむと思ふを、年頃事に觸れて、その怨戔し給へる氣色はなむ漏し給はぬ。賢しき人といへど、身の上になりぬれば、事違ひて心動き、必ずその報見え、歪める事なむ、古だに多かりける。如何ならむ折にか、その御心ばへ綻ぶべからむと、世の人もおもむけ疑ひけるを、遂に忍び過し給ひて、春宮などにも心を寄せ聞え給ふ。今將た又なく親しかるべき中となり、睦び交し給へるも、限りなく心には思ひながら、本性の愚なるに添へて、子の道のなか〳〵餘所の事に聞え放ちたる

さと餘所事のやうに素知らぬ振をしてゐる。今上の御事は、先帝の御遺言通りに、すべてを定めてお仕へしておいたから、かく末世の明君として、自分のこれまでの不名譽を取返して下さる。これは望み通りでうれしい事である。この秋、源氏邸へ行幸あつてからは幼時の親しみが一入想ひ出されてしきりに逢ひたく思はれる。お目にかゝつてお話したいこともある。必ず御自身訪ねて下さるやう勸めて下さい」

と涙ぐみつゝ仰せられる。中納言は

「いや過去の事は、何とも私にはよくわかりませぬが、年齡も加へまするとともに、御奉公も重ね、世間の樣子もいろ〳〵見知りまするにつれ、父源氏とも巨細の事につけ、又內々のさるべき話の序なとにも『昔は隨分不快なことがあつて……』など、それとなく父が述懷する事なぞは決してございません。ばかりか『こんなに朝廷の御後見を申上げながら、中途で隱遁の本意を遂げ樣にて侍る。內裏の御事は、かの御遺言違はず仕う奉り掟てしかば、斯く末の世の明らけき君として、來し方の御面をも起し給ふ。本意の如、いと嬉しくなむ。この秋の行幸の後、古の事取添へて、ゆかしく覺束なくなむ覺え給ふ。對面に聞ゆべき事ども侍り。必ず自ら訪ひ物し給ふべき由、催し申し給へ」など、打潮垂れつゝ宣はす。中納言の君、「すぎ侍りにけむ方は、とも かくも思ふ給へ分き難く侍り。年龍り入り侍りて、朝廷にも仕う奉り侍る間、世の中の事を見給へ罷り歩く程には、大小の事に付けても、內々の然るべき物語などの序にも『古の憂はしき事ありてなむ』など、打かすめ申さるゝ折は侍らずなむ。『斯く朝廷の御後見を仕う奉

ようと、專ら籠居して暮してからは、何事にも交渉もない有樣で、先帝の御遺言の次第も實行し得ず、それにあなた樣御在位の間は、年も若く器量も足らず、上には賢い輔佐の臣も多かつたので、わが忠勤を果して、見て戴く機會もなかつた。只今は、御退位遊ばしお閑靜なお暮しの折にこそ、隔てなうお對手にも參りたいのだが、何分にも自由には動くことの出來ぬ身の有樣で、自然、心ならぬ御無沙汰を申上げてゐることだ』と時々歎いてをられまする」

と奏上せられる。この人はまだ廿歳にも足らぬ年頃であるが、態度もよく整ひ、容貌も盛りの美しさが見え、實に感じのいゝ姿を院はつく〴〵と御覽になりつゝ、この心がかりな姫宮の世話びとにこの人を――と內々思召すのであつた。

「そなたは太政大臣の婿になられたそうな。これまでいろ〳〵はせ給ふ姫宮の御後見にこれをやなど、人知れず思し寄りけり「太政大臣の邊に、今は住みつかれにたりとな。年頃心得ぬさまに聞きしりさして、靜かなる思ひを叶へむと、偏に籠り居し後は、何事をも知らぬやうにて、故院の御遺言の事もえ仕う奉らず。御位におはしましゝ世には、齡の程も、身の器物も及ばず、賢き上の人々多くて、その志を遂げて御覽ぜらるゝ事も無かりき。今斯く政を去りて、靜かにおはします頃ほひ、心の中をも隔なく、參り承らまほしきを、流石に何となく所狹き身の裝ひにて、自ら月日を過す事』となむ折々歎き申し給ふ」など奏し給ふ。二十にもまだ僅なる程なれど、いとよく整ひ過して、容貌も盛り匂ひていみじく淸らなるを、御目とゞめて打まもらせ給ひつゝ、この持て煩

面倒なこともあつたと聞いて氣の毒に思うてゐたが、それで安堵したやうなものゝ、でも、少し妬ましい氣のすることもあるのだが」

と仰せられる御樣子を、何事を指して言はれるのかと不審に思うて考へると、この姫宮をこれほどに大切にせられて、よき人もあらば打ちまかせて、心やすく世を捨てたいと思召してゐられると自然きゝ及ぶこともあつたので、さてはその件かと思ひ合せたがすぐ悟り顏に返答の出來るものではない。で、たゞ

「私のやうなつまらぬ者は、身の極りなどもつきにくゝて——」

とだけ申上げて話を打切られた。女房達は御簾の内から覗きなどして、「ほんとに、世にもまれな容顏心ばせの人や、本當にお立派な」など、口々に集り噂するのを年寄たちは「いや、でも、あの父の院樣があれ程のお年ばえの頃の御樣子には及ばれぬやうだ。若い源氏は、それは眩しい程の御器量であつた」と、とり〳〵に言がいとほしかりしを、耳易きものから、流石に妬く思ふ事こそあれ」と宣はする御氣色を、如何に宣はする事にかと、怪しく思ひ廻らすに、この姫宮を斯く思し扱ひて、然るべき人あらば預けて、心安く世をも思ひ離ればやとなむ思ほし宣はすると、自ら漏れ聞き給ふ便ありければ、さやうの筋にやとは思ひ寄れど、ふと心得顏にも何かは答へ聞えさせむ。たゞ、「はか〳〵しくも侍らぬ身には、寄方も侍ひ難くのみなむ」とばかり奏して止みぬ。女房などは覗きて見聞えて、「いと有難くも見え給ふ容貌用意かな。あなめでた」など集りて聞ゆるを、老いしらへるは、「いで、然りとも、かの院の斯ばかりにおはせし御有樣とは、え淮ひ聞え給はざめり。いと目もあやにこそ清ら

ふのを聞召して

「誠に源氏は格別の人柄であつた。當節ではあの時代よりも一層老成して、光るといふ美稱も、まさしくこの人に當るかと思はれる程の美しさが、いよ〳〵添うて來た。眞面目な表立つた方面から見れば犯し難く凛として、たとへるにものもない心地がせられるのに、又戲言を交して打解けての遊びの折は、その方につけて無類の愛敬が溢れ身にしむほどの美しさが、雙びなく見ゆるのは、全く珍らしい。何をさせても前世の果報がおもはれる程の稀有の人柄である。深宮に人となり、しかも時の帝王が又となく寵愛せられ、あれ程に撫で育て身にも替へていとしく思召したが、あれは、我意のまゝに驕りたかぶることもせず廿歳になるまでは納言の位置も受けずに過された。二十一歳になつて、始めて參議と大將とを兼任せられたやうである。それに物し給ひしか」など言ひしろふを聞召して、「誠に彼はいと樣異なりし人ぞかし。今は又その世にも老成優りて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆる匂なむ、いとゞ加はりにたる。麗しだちて、はかばかしき方に見れば、嚴しく鮮やかに、目も及ばぬ心地するを、又打解けて、戲言をも言ひ亂れ遊べば、その方に付けては、似る物なく愛敬づき、懷かしく美しき事の雙び無きこそ、世に有難けれ。何事にも前の世推量られて、珍らかなる人の有樣なり。宮の內に生ひ出でて、帝王の限なく愛しき者にし給ひ、然ばかり撫で傳き、身に替へて思したりしかど、心のまゝにも納言にもならずなりにきかし。一驕らず卑下して、二十が內には、一つ餘りてや、宰相にて大將かけ給へりけむ。それに

に較べてこの夕霧は、格段な昇進をしたのは、子孫次々に聲望も加はるのであらう。殊に公務に於ける才能用意などは、これも大方父に劣るとは見えず、間違つても、老成した感じだけは立勝つてゐるやうだ」

と賞美せられる。

姫宮がまことにお美しく、年若く無邪氣な御樣子を見られるにつけて、

「この子をば愛して吳れて、その上に子供らしい缺點を庇護して養成してくれさうな賴もしい人物に委したいものだ」

など仰せられる。重立つた乳母たちを召されて、御裳着の御用意など指圖せられる序に

「あの六條の大臣源氏が式部卿の親王の娘紫の上を教養したやうな風に、この姫を預り育てゝ吳れる人もないことか、臣下の中にはゐないし、今上はすでに皇后がおありだ。又次々の女御達も皆身

よなく進みにためるは、次々の覺えのまさるなめりかし。誠に賢き方の才、心用ゐなどは、これもをさをさ劣るまじく、誤りてもおよずけりまさたる覺え、いと異なめり」など、めでさせ給ふ。

「姫宮のいと美しげにて、若く何心なき御有樣なるを見奉り給ふに、も「見はやし奉り、且は又片生ひならむ事をば、見隱し教へ聞えつべからむ人の、後安からむに預け聞えばや」など聞え給ふ。大人しき御乳母ども召出でて、御裳著の程の事など宣はする序に、「六條の大殿の、式部卿親王の女おほし立てけむ樣に、この宮を預り育まむ人もがな　直人の中には有難し。內裏には中宮侍ひ給ふ。次々の女御達とても、いとやむごとなき限り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com